

研究代表者 荒野泰典（立教大学）

『グローバル化の歴史的的前提に関する学際的研究』

2003年8月

## テキストとしての濟州島地図

高橋公明

### はじめに

本稿は前近代の濟州島および濟州島を含む地図を素材にし、そこに現れた諸表現や記述を海域史の観点から検討することを目的とする。そこでまず、地図という資料を素材にするにあたり、どのような態度で解釈するのかを明らかにする。

応地利明は、古地図や絵地図に関するこれまでの人文地理学や地図学史の研究を三つの流れとして整理した。第一は、地図発達史ともいべき流れで、「荒唐無稽」な表現が「正確」な表現に発展していくという観点から解釈するもので、ある意味地図学の中心的な潮流である。第二は、荘園、都市、村落、あるいは寺院など、失われた過去の景観を復原するために絵地図を利用するもので、文献史学とか考古学などで盛んにとられる方法である。第三は、絵地図を文学作品などと同様に意味の満ちたテキストとして扱うもので、脱構築とか記号論などの立場を取ることが多い（1996年）。本稿では特定の立場を取るわけではないが、おもに第三の立場から地図を検討する。

地図をテキストとして扱うとはどのような姿勢を意味するのか。応地が言うように、地図に描かれた地形、切り取られた地域、記号、記述などのすべてに、地図製作者によってこめられた意味があると想定し、それらの表現を支えているコード（暗黙の了解）の解読の発見を通じて、それらの意味を解釈することである。

さらにテキストをどのような見方で解釈するかについて、ひとつ強調しておきたい。筆者は、これまで日本の中世文学を素材にして、そこに現れた境界観、異国観などを検討する機会がいくつかあった。そこで繰り返し確認したことはひとつの対象について、しばしば異なる方向や価値観を持つ表現、流行の言葉で言えば「言説」がひとつのテキストのなかに並存していることであった（1995年、2001年、2002年）。この傾向は地図をテキストとした場合も見られるはずである。このような想定で濟州島および濟州島を含む地図を検討する。

とはいえ、本稿は共同研究の成果の報告であり、かつ、そのなかで関係資料についての調査も行っており、まずはその成果の紹介からはじめる。

## 1. 『濟州島の昔の地図』と『耽羅巡歴図』

当該研究の一環として、2002年8月26日から9月3日にかけて、ソウル首都圏では韓国国史編纂委員会とソウル大学校奎章閣、濟州島では濟州大学校博物館を中心に資料調査を実地し、多くの成果を得た。そのなかで次の二点の資料を入手できたことは、濟州島の地図に関する重要な成果であった。第一に、日本語訳すると『濟州島の昔の地図』（濟州道民俗自然史博物館、1996年）となる古地図の地図帳（以後、注記がないかぎり韓国で発行された文献の引用は筆者の責任で日本語訳したものである）、第二に、『耽羅巡歴図』（濟州市、初版1994年、再版2000年）と題する資料を復刻したものである。前者は非売品でほとんど残部もなかったが、この地図帳の編纂者の一人である韓国国史編纂委員会・研究編纂室長の李相泰（イサンテ）博士の尽力と濟州道民俗自然史博物館のご好意により入手することができた。後者は濟州大学校博物館研究員の高光敏（コガンミン）氏の尽力によって入手することができた。

前者は5章編成で、「濟州全図」と題する第1章は30種の濟州島地図を収録している。ただし、そのなかの数点は濟州島の一部のみを描いたものである。「全羅道図内濟州地図」と題する第2章は、かつて濟州島が全羅道の一部であったことを反映し、全羅道地図の一部として濟州島が含まれているもの32種を収録している。「全国図内濟州地図」と題する第3章は、朝鮮地図の一部として濟州島が含まれているもの7種を収録し、そのうち3種については濟州島を中心にした拡大図も載せている。「西洋地図ならびに現代式地図」と題する第4章は、西洋で作成された古い日本地図や朝鮮地図のなかで濟州島が描かれているもの4種、朝鮮総督府が作成した濟州島の地図、さらには現代の濟州地図など5種を収録している。そして第5章は李相泰「濟州の古い地図の研究」という解説的な論文である。以上のうち、本稿にとってもっとも重要なのは第1章で、ここで掲載されている地図を見ることで、前近代に濟州島を主役として描いた地図の全貌を知ることができる。

韓国では近年、古地図を編纂した美しい地図集がいくつか出版されているが、濟州という特定の地域に焦点を合わせたこの地図集も、そのような流れから出てきたさらに新たな潮流として見ることができる。このような地域を限定した古地図集の例として、このほかに『水原の古い地図』（水原市、2000年）があり、李相泰氏によれば、江華島地域についても企画が進んでいるとのことである。

後者は、1702年、濟州牧使兼濟州兵馬水軍節制使（濟州における文官および武官の頂点にたつ責任者）である李衡祥（イヒュンサン）が、慣例に従って約一ヶ月かけて濟州島各地を巡歴し、その地勢や軍・民の様子などを画工の金南吉（キムナンギル）に命じて40枚の絵と1枚の絵地図によって集成したものである。それぞれの作品についての解説文は韓国語だけでなく、英語、中国語、日本語があり、この資料を国際的なものにしよう

という済州市の意気込みが伝わってくる。そのなかの1枚は、前者にも収録されている「漢拏壯矚」という絵地図で、済州島とその周辺を詳しくかつ美しく描いている。「漢拏」は言うまでもなく済州島の主峰漢拏山からきており、済州島の別称である。「壯矚」は盛んによく見るというような意味で、英語では Panorama と訳している。当然、この資料のなかでは「漢拏壯矚」が検討の中心となるが、前者がさまざまな当時の地図集や地誌などから済州島の地図を切り取ったものが多いのに対し、後者はひとまとまりの資料集のなかにある部分としての済州島の地図ということが容易に見えるようになっている。

## 2. 済州島の地図の概略

ここではまず『済州の昔の地図』の1章に収められた済州島の地図を概観し、その特徴について検討する。年代的には17世紀末あるいは18世紀初頭あたりが上限で、1914年が下限である。以下、順に紹介していく。

表1 済州島の地図一覧（『済州の昔の地図』1章「済州全図」より）

| 番号 | 名称          | 大きさ           | 製作時期         | 形態    | 製作  | 所蔵          |
|----|-------------|---------------|--------------|-------|-----|-------------|
| 1  | 耽羅地図并序      | 154×94cm      | 1709年(肅宗35年) | 白黒木版本 | 李奎成 | 済州道民俗自然史博物館 |
| 2  | 耽羅壯矚『耽羅巡歴図』 | 47×30cm       | 1702年(肅宗28年) | 着色筆写本 | 李衡詳 | 韓国精神文化研究院   |
| 3  | 済州牧『輿地図』    | 29.2×19.2cm   | 1698年～1703年  | 着色筆写本 |     | 国立中央図書館     |
| 4  | 済州三県図『海東地図』 | 30.5×47cm     | 1750年頃       | 着色筆写本 |     | ソウル大学校奎章閣   |
| 5  | 済州三県図『海東地図』 | 30.5×47cm     | 1750年頃       | 着色筆写本 |     | ソウル大学校奎章閣   |
| 6  | 済州地図        | 102.5×126.5cm | 1700年代前半     | 着色筆写本 |     | 崇實大学校博物館    |
| 7  | 済州三邑都総地図    | 122×119.5cm   | 1770年代       | 白黒筆写本 |     | 済州道民俗自然史博物館 |
| 8  | 耽羅図『寰瀛誌(上)』 | 31.5×22cm     | 1822年        | 白黒木版本 | 魏伯圭 | 国立中央図書館     |
| *9 | 済州『朝鮮疆域総図』  | 37.5×40cm     | 1700年代前半     | 着色筆写本 |     | ソウル大学校奎章閣   |
| 10 | 耽羅地図并識      | 1を拡大したもの      | 1841年        | 木版本   | 李源祚 | イスハク個人所蔵    |
| 11 | 済州『各邑地図』    | 29.2×19.2cm   | 1700年代中葉     | 着色筆写本 |     | 国立中央図書館     |
| 12 | 済州『湖南全図』    | 21×17cm       | 1700年代       | 着色筆写本 |     | 嶺南大学校博物館    |
| 13 | 済州『湖南全図』    | 21×17cm       | 1700年代       | 着色筆写本 |     | 嶺南大学校博物館    |

|     |                 |                  |              |            |     |             |
|-----|-----------------|------------------|--------------|------------|-----|-------------|
| 14  | 済州『全羅南北道輿地図』    | 33.5×38<br>cm    | 1700年代       | 着色筆写<br>本  |     | 嶺南大学校博物館    |
| *15 | 済州『八道地図<湖南防輿編>』 | 26.4×18<br>.3cm  | 1700年代<br>後半 | 着色筆写<br>本  |     | 国立中央図書館     |
| *16 | 済州『海東諸国地図』      | 32.5×51<br>.1cm  | 1700年代<br>末  | 着色筆写<br>本  |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *17 | 青邱図             | 35.2×23<br>.2cm  | 1834年        | 着色筆写<br>本  | 金正浩 | 国立中央図書館     |
| *18 | 大東輿地図           | 20×30.5<br>cm    | 1861年        | 木版本に<br>加彩 | 金正浩 | ソウル大学校奎章閣   |
| *19 | 東輿図             | 20×30.5<br>cm    | 1800年代<br>後半 | 着色筆写<br>本  | 金正浩 | ソウル大学校奎章閣   |
| 20  | 済州三邑全図          | 68.9×10<br>8.6cm | 1872年        | 着色筆写<br>本  |     | ソウル大学校奎章閣   |
| #21 | 済州地図            | 58×98.3<br>cm    | 1872年        | 着色筆写<br>本  |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *22 | 大静郡地図           | 57.8×97<br>.4cm  | 1872年        | 着色筆写<br>本  |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *23 | 旌義郡地図           | 58×97.6<br>cm    | 1872年        | 着色筆写<br>本  |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *24 | 耽羅全図『古地図帖』      | 34×48cm          | 1700年代       | 着色筆写<br>本  |     | 嶺南大学校博物館    |
| 25  | 済州牧『広輿図』        | 37×28.3<br>cm    | 1800年代<br>前半 | 着色筆写<br>本  |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *26 | 済州旌義大静『海東輿地図』   |                  | 1800年代<br>後半 | 着色筆写<br>本  |     | 国立中央図書館     |
| #27 | 済州地図『済州郡邑誌』     | 53.5×10<br>0.8cm | 1899年        | 筆写本        |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *28 | 大静郡地図『大静郡邑誌』    | 31.1×41<br>.5cm  | 1899年        | 筆写本        |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *29 | 旌義地図『旌義郡邑誌』     | 31.6×40<br>.7cm  | 1899年        | 筆写本        |     | ソウル大学校奎章閣   |
| *30 | 耽羅略図            | 40.5×60<br>cm    | 1914年        | 白黒筆写<br>本  |     | 済州道民俗自然史博物館 |

<備考1>番号に\*があるのは、地図の上部が北で、かつ朝鮮以外の地名のないもの。

<備考2>番号に#があるのは、地図の上部が南で、かつ朝鮮以外の地名のないもの。

<備考3>それ以外のものは、地図の上部が南で、かつ朝鮮以外の地名があるもの。

済州島を中心にした古地図のなかで、現存するおもな類型は表1で網羅されていると思われる。個別具体的な検討に入る前に、まず基本的な傾向を確認しておきたい。表1の<備考1>から<備考3>にあるように、地図のなかで方向をどのように設定するか、あるいは朝鮮以外の地名が含まれているかどうかという観点からすると、3類型に分けることができる。もちろん、地図を分類するにはさまざまな方法があるが、ここでは海域史の立

場からも重視すべき点、すなわちどちらから見ているのか、どこまでを地図の範囲に含めているのかを分類の基準とした。

その3種類のなかで、もっとも多数派は無印のもので15例を数えることができる。それらには地図の上部を南とし、かつ地図のなかに朝鮮以外の地名を含んでいるという共通点がある。製作が1698年から1703年と推定された3番、1702年の2番をはじめとし、1700年代の比較的時期の古いものはほとんどこの類型であった。時代が下っても8番、10番、20番および25番など1800年代にも見られることから、この類型の地図が、後に完全になくなるというわけではないが、表1のなかでは圧倒的に古い時代に見られる類型である。

ついで多いのは、\*印があるもので13例ある。それらには地図の上部を北とし、かつ地図のなかに朝鮮以外の地名を含んでないという共通点がある。時期的には9番の1700年代前半が古い例だが、それ以外は1700年代後半以降、20世紀初頭にいたるまで主要な類型である。1700年代から出現し、しだいに無印と対抗するようになり、ついに1800年代には主流となった類型である。#印があるのは21番と27番の2例で、地図の上部を南とし、かつ地図のなかに朝鮮以外の地名を含んでいないという共通点があり、いずれも1800年代の製作である。したがって、これも\*印のものと同様、あとからできた類型であろう。

以上、表1に載せられた30例の済州島の地図を一覧し、地図の上部を南とし、朝鮮以外の地名を含んでいる類型のものが、より古いということが判明する。この点を前提にし、さらに詳しくこの類型について検討する。先にも述べたように、表1の地図の多くがそれ自体で完結している単独のテキストでなく、地図帳あるいは地誌などの複合テキストの一部を切り取ったものである。したがって、さらに具体的な検討に入る段階では、それぞれのテキストに戻って検討することが必要である。

### 3. 済州島の地図についての研究

表1にあるような済州島の古地図について検討している研究をいくつか紹介してみよう。韓国の古地図研究の大家である李燦（イチャン）は済州島の地図についても基礎的な検討をしている（1979年）。李燦は表1の2番の『耽羅巡歴図』に収められている「耽羅壯矚」から検討をはじめ、同じく1番の「耽羅地図并序」、ついで「耽羅地図」という地図上に方位角線がひかれた地図を検討し、済州島の古地図の形態には大きく二つの系統があるのではないかと推定している。そして2番と1番については、基礎的な事柄を明らかにしており、それぞれについて以下に概略を示す。

「耽羅壯矚」は、済州島を単独で描いた地図のなかで、現存するものとしては最古の地

図のひとつである。第一の特徴は、一般の地図のように東西南北の四方位ではなく、「子癸丑艮寅甲卯乙辰巳丙午丁未坤申庚酉辛戌乾亥壬」の二十四方位が地図の真下から時計周りで朱書されていることである。また、「子」が地図の真下、すなわち北であることから明らかのように、地図の上部を南としている。これについては、南海岸の地図にはこのような例が他にもあるということ、山などの描き方から、陸地、すなわち北からの眺望であることを確認している。

第二の特徴は、済州島から直線で航海して到達できる島、国名、地名が距離に関係なく、地図の周辺に描かれていることである。地図の下部、すなわち北側には南海岸の地名が記され、外国では、日本、一岐、女人国、安南、交趾、暹羅国、満刺加、寧波、蘇杭、揚州、登萊、青州などが地図の左右と上部に表示されている。さらに地図の下部の枠外に済州島から外国各地までの方位と距離の説明もある。これ以外にも地形表現上の特徴などについて記述している。

「耽羅地図并序」は前者より7年後に作成された地図で、表1からも分かるように、縦が154cmで横が94cmと巨大である。また、地図の上部と下部には済州島の地誌的な記述が見られるが、地図そのものの基本的な特徴は前者と同じで、おそらく李某などの複数の人が前者の地図の原本を補充して作成したのだらうと推測している。なお、李燦は済州島の地図には二つの系統があると推定しているが、簡単に言えば、地図の上部を南とするものと北とするものに分類しており、「耽羅壯矚」と「耽羅地図并序」はともに同じ系統に位置づけている。

以上、李燦は地図学者らしく、本稿で問題にしているテキストの意味というようなことよりも、地図作成過程と地図のなかの表現法に焦点を合わせて記述している。

『耽羅巡歴図』の資料的な価値と意義について検討しているオ・サンハクの研究について紹介しよう(2000年)。オ・サンハクは李燦の検討を前提にしながら、表1の1番の「耽羅地図并序」と、『海東地図』という地図集に収録されている4番と5番の2種類の「済州三県図」を参照しながら、「耽羅壯矚」をはじめとする『耽羅巡歴図』の絵画および絵地図としての特徴を検討している。以下において、李燦の指摘と重ならない点に限って要約する。

第一に、「耽羅地図并序」の作成者を李某ではなく、地図作成時(1709年)の済州牧使李奎成(イギョソン)と特定したことである。これは『耽羅巡歴図』における李衡祥と同じ立場であり、テキストの性格を考える上で重要な手がかりになる。

第二に、李燦が想定した二つの系統と異なる基準で、やはり二つの系統を指摘していることは興味深い。クオン・ヒョンチョルの検討を参照しながら、ここで問題にしている諸地図の作成される以前に、すでに旧地図と新地図という区分があり、その反映が『海東地

図』に収録されている4番と5番の二つの「済州三県図」に現れていると推定している。

4番の「済州三県図」は「耽羅地図并序」と同じ系統で、大型の一枚地図の形態が多く、済州島の姿が比較的に実在のものに類似した形で描かれており、本土の南海岸の間に散在しているいくつかの島嶼、中国、日本、琉球などの外国も方位では歪曲が少ないほうである。それに対して、5番の「済州三県図」は、前者に比べ規格も小さく済州島の姿も東西に圧縮された歪曲された形態になっており、済州島周辺の島嶼や南海岸地域、そして中国、日本をはじめとする外国の地名には距離関係をほとんど考慮せずに描かれていて、前者に比べて事実性が低い。

李燦が言う二つの系統は、先に見たように、表1の地図全体を見た場合に首肯できる推論である。また、表1の無印の地図、すなわち古い形式の済州島の地図に限ってみた場合、オ・サンハクの分類もやはり妥当なものといえる。ただ、オ・サンハクの主眼である『耽羅巡歴図』に収められた「耽羅壯矚」については、上の二つの系統のどちらでもなく、当時の済州島の地図のなかでは豊富な情報が収録され、事実的な側面が正確に表現されている優れた地図として評価している。この点については私見だが、東西が圧縮されているなどいくつかの特徴は、5番の「済州三県図」の先行する系統と考える余地がある。

第三に、「耽羅壯矚」が誕生した知的背景について重要な指摘をしたことである。李衡詳が著述した済州島についての地理誌『南宦博物』を参照し、彼がマテオリッチの『坤輿万国全図』を閲覧した経験があること、外国に対する博識を通じて地理的な中華観を克服し、自分が位置しているところが天下の中心であると言及したこと、さらに、済州島に在任中、ベトナムまで漂流し、帰国した人から外国の事情を詳細に聞いていることなどを指摘した。

第四に、南側を地図の上段に配置することについて、ある種の解釈の方向を示したことである。すなわち、このような様式は日本や琉球国を描いた地図からも同様に見られるとし、過去の地図では一つの方向を基準にして描かれず、どのような視点で見ているかによってその配置が異なると指摘したのである。ここで日本図や琉球図と同様な配置であることに注意を促したことは、きわめて重要である。

藤田明良は、済州島とその周辺地域に関する海を媒介とするさまざまな交流に焦点を合わせ、多様な史料についての総括的な紹介と検討をした(2001年)。そのなかで、前二者と同じく済州島に関する地図についても言及し、いくつかの重要な指摘をした。

第一に、「耽羅壯矚」のなかの外国についての記述を詳しく検討し、それが、18世紀初頭の認識ではなく、15世紀にさかのぼることを崔溥(チェブ)の『漂海録』を引用して明らかにしたことである。崔溥は1487年に敬差官として済州島に派遣されたが、父の死を聞いて、翌年の閏正月、帰路につく。その途中、暴風雨に遭って明の浙江省まで漂流する。このときの経験を記述したのが『漂海録』で、このなかで黒山島を中心とした地理

観を説明しており、これがほぼ、「耽羅壯囑」の表現と記述に対応することを明らかにした。

第二に、崔溥の地理観の基礎となった地図を「混一疆理歴代国都図」の系統のものではないかと推定し、さらに濟州島の地図に見える外国についての描写も「混一疆理歴代国都図」の系統の地図の影響ではないかという推論にまでいたったことである。

第三に、「耽羅壯囑」を含む『耽羅巡歴図』や「耽羅地図并序」などの製作は、「中央から派遣された牧使の主導であり」、「これらの地誌や地図が濟州島に向けてではなく、中央の政界・学界を意識したもの」で、「この島独自の歴史的体験や対外意識が、地図に反映していないのは」当然と位置づけ、「地図の海外情報は朝鮮王朝初期に王宮に蓄積されたものであって、濟州島の歴史的経験や地域独自の認識とは、無関係」と結論したことである。

李燦、オ・サンハク、藤田明良の濟州島の地図についてのさまざまな指摘は、いずれもきわめて有益である。そのなかでも藤田の第三の指摘は、テキストとして地図を解釈しようとする本稿にとって重要な意味をもつ。言い換えれば、藤田の主張に異論を唱えることで、本稿の立場はより明確になるということである。

本稿の冒頭でも述べたように、日本の中世文学を素材にして、そこに現れた境界観、異国観などを検討し、そこで確認したことは、ひとつの対象について、しばしば異なる方向や価値観を持つ表現、流行の言葉で言えば「言説」がひとつのテキストのなかに並存していることであった。この傾向は描写され、記述される地図というテキストにおいても認められることではないだろうか。ここで検討している地図に引き付けて言えば、テキストが<中心-周縁>的な意味において、中心の立場から作成されたものであったにしても、そのなかに周縁の立場からの言説がないことを保証するものではないということである。

#### 4. 言説1：陸地から見る視線

ここでは、表1のなかでも比較的古い時期の濟州島の地図に見られる二つの大きな表現上の特徴に注目し、そのなかのひとつが濟州島を陸地、すなわち中心から見る「言説」を代表し、他のひとつが周辺世界を濟州島から見る「言説」を代表するものとして位置づけられること示す。前者は、地図の上部を南とする技法で、後者は濟州島の南側にあたる地図の上部に外国などを配置する表現である。

それらの「言説」を議論するために、表1のなかから1番の「耽羅地図并序」（地図1）、2番の『耽羅巡歴図』の「耽羅壯囑」（地図2）、4番と5番の『海東地図』に収められている2枚の「濟州三県図」（地図3と地図4）という3種のテキストから4枚の濟州島の地図を選び、具体的に検討する。

まず地図の上部を南とする技法について検討する。4枚の地図に共通して確認できることは、李燦が指摘しているように、すべて濟州島の北側から鳥瞰した視点から描いている



ということである。それは山の描き方によって明らかである。すなわち、島の南側を含め、山々の北側の斜面を中心に描いて立体感を出そうとしているからである。この北側から濟州島を見るという視点にどのような象徴的な意味があるのだろうか。

ここでまず注目しなければならないのは、地図1と地図2のテキストの成立の経緯である。いずれも、李奎成にしても、李衡祥にしても、作成された時期に濟州島の牧使に就任しているということである。朝鮮国王から濟州島を統治する最高位の官職に任命されたことが、これらの作品をつくるもっとも大きな動機であったことは間違いない。その点を考慮することによって、北の方から濟州島を眺めるという視点のもつ意味はより明確になる。

牧使として赴任することが作品を作る上で大きな動機であったことを、まず内容から確認してみよう。「耽羅地図并序」はこれ自体が単独のテキストで、地図の上部と下部に濟州島に関する総括的な記述がある。古代からの歴史、島内の重要な地域の沿革、馬や柑橘類など貢納品についての数字を挙げての例示、軍事施設、宗教施設、名勝地などについての簡潔な記述、人々の生活文化、海外諸国との地理的な関係など、じつに多様な記述からなっている。おそらく李奎成は、これらの記述と地図で描かれた内容を牧使として管轄しなければならない職掌の範囲として理解していたのであろう。

「漢拏壯矚」あるいはそれを収めた『耽羅巡歴図』の場合は、さらに明瞭に牧使としての責務あるいは権能を象徴した作品として見ることができる。濟州で実施される官吏登用試験を描いた「陞補試士」、濟州島から献上される馬の最終点検や柑橘類の貢進を描いた「貢馬封進」「柑橘封進」、動物を献上するために軍を動員して行なう狩を描いた「橋来大獵」、朝天鎮での軍事教練を描いた「朝天操点」、名勝地を探訪する「金寧觀窟」など、濟州牧使兼濟州兵馬水軍節制使である李衡祥が管轄し、あるいは指揮したさまざまなことがらを、金南吉に命じて40枚の絵に仕上げさせたのである。これら40枚の絵の前にそれらの行事が行なわれた地区名、施設名、名勝地などを書きこんだ濟州島の地図、すなわち「漢拏壯矚」がおかれている。この地図はまさに李衡祥が管轄し任務として視野に入れていたことを一枚の紙の上に視覚化したものである。

以上のようにテキストを解釈することによって、地図の上部を南とする技法をつぎのように位置づけることができる。すなわち、牧使として赴任する官僚が、漢城から南に向かい、陸地から濟州島へ接近する行程とそこから見た濟州島像を表象したものである。いわば、<中心一周縁>的な見方で言えば、中心から周縁を見た像といえる。

この技法をもちいた地図3と地図4の地図について検討すると、さらにもう少し踏み込んだ解釈が可能である。二つの地図は『海東地図』という巨大な地図集の一部である。この巨大な地図帳は朝鮮王宮の図書館に所蔵されていたものだが、テキストの類型から見ると孤立したものではない。

朝鮮後期に「輿地図」「朝鮮地図帖」「広輿図」等のさまざまな名前の地図帳が大量に作成された。現在も、韓国だけでなく、日本や欧米の多くの博物館や個人が所蔵している。白黒の木版印刷であったり、彩色の手書きであったり、作り方はさまざまで、細部においてもいくつかの系統があるのか確かなことは不明だが、収められる地図の種類はほぼ共通に見られる。描いている範囲がもっとも広いのは「天下図」で、大陸を海が囲み、さらにその外側を陸が囲み、さらに海が囲むという構図の有名な世界図で、「円形世界図」（李燦、1991年）とか“wheel map”（Ledyard, 1994）とか呼ばれている。ついで中国を中心に朝鮮などを構図に組み込んだ「中国図」あるいは「十三省図」、当然、朝鮮を描いた地図、全羅道など八道をそれぞれ描いた地図が続く、通常、「日本国図」や「琉球国図」も含まれている。

大量に作成されたこれらの地図帳は、朝鮮後期の両班およびそれに連なる階層の人々の世界観に大きな影響を与えたと推定される史料群である。一八世紀中ごろのものと推定されている『海東地図』はそれをさらに巨大化したものである。北の境界地域、八道だけでなく各道内の郡図・府図・県図などを加え、総数400弱枚からなる大地図帳と見ることができる。この巨大なテキストの一部として「済州三県図」を解釈してみよう。

日本や琉球を描いた地図の上部を南とする構図は、オ・サンハクが示唆したように、「輿地図」などでは一般に見られることである。それは『海東地図』の「倭国地図」や「琉球図」でも確認できる。そして重要なことは、この巨大な地図帳のなかに、このような構図は他に見られないということである。例えば境界地域の島の描き方に注目して「鬱陵島」を観察しても、それは陸から見た描き方、すなわち上部を東にする構図ではなく、上部を北にした構図である。また、山の立体感の描き方からして、すべて海から見た図となっていることが特徴となっている。海から見た構図は、それ自体、検討する価値はあるが、ここではとりあえず陸地、あるいは漢城から見た図ではないことを強調しておきたい。そのほか、慶尚道や全羅道の島々の描き方に注目しても類似の構図はない。

巨大なテキスト『海東地図』のなかの一部である2枚の「済州三県図」を以上のような文脈においてみると、これらの地図の特異性が明確に浮かび上がってくる。地図の上部を南とする構図は、済州島を周縁とみなす観念だけでなく、日本や琉球など外国に比肩できる外部性を象徴しているものと解釈できるのである。これは朝鮮を描いた地図にほとんど対馬島が描かれ、外国の領域であるにもかかわらず、対馬島を朝鮮の内部であるかのように観念していたことに対比できる（高橋、2001年）。

朝鮮という王朝、あるいはその支配層にとって、済州島が朝鮮の内部であるということは必ずしも自明のことではなかった。三別抄の乱が鎮圧されて以降の牧場経営を中心としたモンゴル勢力の統治および管理、元・明交替期における島内の反乱、諸地域の海上勢力

と濟州島人の交流などがあり、高麗や朝鮮の一地方という状況ではなかった。これは、14世紀末からはじまり15世紀中ごろまで続く朝鮮王朝による濟州島の朝鮮化をめざす諸政策によって、ようやく濟州島は朝鮮の一地方としての歩みをするようになる（藤田、1997年。高橋、2000年）。この15世紀中ごろまでの濟州島の歴史的な状況と、時間的には後世となるが、18世紀はじめに作成された地図の濟州島を外部とみなす表現は対応している。

## 5. 言説2：濟州島から見る視線

同じように濟州島の南側にあたる地図の上部に外国などを配置する表現についても検討してみよう。

「耽羅地図并序」（地図1）の地図中にある外国地名から確認する。全ての地名は地図の外枠に沿って並んでおり、右側の枠の中ほどやや下のほうから上に向かって、「青州」「山東」「登来」「揚州」（不鮮明）「杭州」「金山」（島として）と続き、右上の角に「松江府」が位置し、上枠の右から左に「蘇州」「閩甌」とここまで中国の地名が書きこまれている。続いて「滿喇加」「暹羅」「安南国」と東南アジアの地名があり、そのまま「琉球国」「小琉球」「女人国」「一岐島」と「女人国」以外は東アジアの地名が並んでいる。さらに左側の枠の上から「日本国」「対馬島」とある。「女人国」以外は、どこか、少なくともどのあたりなのか比定できる表現である。

この地図の上段と下段に濟州島に関する記述がなされていることはすでに確認したが、とくにその下段には、二つの外国に関する記述がなされている。ひとつめは漂流に関する記事からの抜粋で、「西南に白海有り。崔溥（チェブ）漂いて台州に到る時、白海を過ぎると云う。東南に黒海有り。海南士人金麗輝、漂いて琉球に到る時、濟州より五日にして黒海に至る。水色墨の如し。掬いて之を視れば、凡そ水と異なる無し。亦た物を染めずと云う。正東に対馬島有り。本島士人田萬成、東餘鼠より西風に遭い、一日一夜漂いて対馬島に到る」と浙江省、琉球、対馬島など東アジアの海域に関する漂流例が紹介されている。

ふたつめは地図の記述と深く関わる記述で、「海外諸国、日本、大小琉球、女人、安南、交趾、広東、福建、暹羅、浙江、山東、寧波、開封、松江、登来、楊・青・蘇・杭州等の地より、相望むを得ずと猶も、界を接し、羅列す。」とある。ついで、よく意味が取れない記述があり、それに続いて「此れに過ぐるは無し。異国の商船、常々洋中を往来し、或いは本島に入泊し、水を借り、柴を覓む」と前半にはさまざまな地名が記され、後半には異国の船が濟州島に水や柴を求めて立ち寄ると説明されている。

まず、地図中に記入されていた外国の地名を下段のふたつめの記述を比べてみると、「交趾」「広東」「福建」「開封」「寧波」など地図にはないものがめだち、逆に「閩甌」など福

建と広東と合わせたような地名とか「女人国」は下段のふたつめの記述にはない。全体的に下段のふたつめの記述のほうが具体的で新しい表現である。これは地図の枠内と枠外の記述がそれぞれ別々のテキストから引用されたことを示している。おそらく地図のほうは、かなり古くから何度も写されてきて、かつ、新しい情報のよってほとんど更新されてこなかったのであろう。

「漢拏壯囑」（地図2）についても同様に、地図中にある外国の地名を列挙する。右側の枠の下より上に向かって「青州」「山東」「登来」「揚州」「蘇杭州」「寧波」とあり、「閩甌」が地図1の「金山」の位置にある。上枠の右から左に「満喇加」「占城？」「暹羅国」「交趾」「安南」と東南アジアの地名があり、ついで「大琉球」「小琉球」「女人国」「一岐」が続く。左側の枠上より下に向かって「日本」「対馬」がある。

地図1と比べると中国の地名では「寧波」が、東南アジアでは「占城」が加わり、「金山」がなくなっている。また、地図1が「琉球国」であるのに対し、地図2は「大琉球」となっている。いずれにせよ、地図のなかの表現の固定性から見ると、モデルとした地図がそれぞれ異なっているのであろう。

つぎに地図2の下段にある外国に関する記述について見ると「東に日本国を距てること二千余里、丙に女人国を距てること八千余里、午に琉球国を距てること五千余里、丁に安南国を距てること一万七千余里、未に暹羅国・占城国を距てること万余里、坤に寧波府を距てること八千里、申に蘇杭州を距てること七千里、庚に揚州を距てること七千里、辛に山東省を距てること万余里、戌に青州を距てること万余里」とあり、地図中の「大琉球」が「琉球国」に、「寧波」が「寧波府」に、「山東」が「山東省」に変わっているが地図1ほどの差異はない。おそらく、地図中の表現を新しくしただけで、異なるテキストから引用したわけではないようである。

『海東地図』のなかの地図1に近い形態の「濟州三県図」（地図3）についても同様に見ていこう。右側の枠の下より上に向かって「青州」「山東」「登来州」「揚州」「杭州」があり、右上の角に「松江府」が位置する。上枠の右から左に「蘇州」「寧波府」「閩甌」とここまで中国の地名で、ついで「満喇加」「占城」「暹羅」「安南国」と東南アジアが続く。さらに「琉球国」「小琉球」「女国」「一岐島」がある。左側の枠の上より下に「日本国」「対馬島」となっている。

同じく、地図2に近い形態の「濟州三県図」（地図4）の地図中にある外国地名は、右側の枠の下から上に向かって「登来州」「揚州」「杭州」「金山」（島として）があり、上枠の右から左へ「蘇州」「呉」「南京」「寧波府」「閩甌」とここまで中国の地名で、ついで「満喇加」「占城」「暹羅」「安南国」と東南アジアが続く。さらに「琉球」「女人国」「一岐島」がある。左側の上から下に「日本国」「対馬島」となっている。

細かく見れば、地図3にのみ「金山」があること、「呉」「南京」が地図4にしかないという違いを指摘できるが、濟州島自体の形態ほどの差異はない。また、2枚の地図の前に「濟州牧」という項目で説明があり、そのなかに「漢羅山の申方に松江府・金山を望見す。西南に白海あり、東南に黒海あり、濟州より五日にて至る。正東に対馬島あり、西風に遭えば一日一夜にて到るべし」と簡単な記述が見られる。

地図1から4まで、外国についての表現には細かな差異はあるが、どれも基本的には同じ構図で、中心に濟州島が南を上配置し、それを朝鮮半島の南端、中国、東南アジア、東アジアの地名が囲んでいるのである。少なくともこの構図から、濟州島が朝鮮半島にかろうじて結びついた周縁化された離島というイメージを思い浮かべることができない。これらの表現と地図に付随した外国についての記述から、濟州島がさまざまな地域に囲まれ、海を通じて世界と結ばれているというメッセージを容易に受け取ることができる。

また、地図3と地図4は、先にも述べたように『海東地図』という巨大な地図集のなかに収録されている。その巨大なテキストのなかにそれらを置いたとき、どのような特徴を際立たせているのであろうか。これも地図の上部を南とする構図と同じく、テキストのなかで類例を見つけることはできない。慶尚道の地図に対馬島が描かれているが、すでに述べたように、朝鮮全体の地図と同様、外国というより朝鮮の一部として対馬島を描いているのである。また、鬱陵島を描いた地図のなかに「刻石立標、倭船倉可居」と倭人の船が寄りつく船着き場のような記述があるが、これはあくまでも島内のある部分を説明したものである。したがって、濟州島を中心にして、それを朝鮮半島南部と中国沿岸、東南アジア、琉球から日本、そして対馬島を配置する構図は、この巨大なテキスト内でもきわめて特異なものと言える。

ここで藤田の「地図の海外情報は朝鮮王朝初期に王宮に蓄積されたものであって、濟州島の歴史的経験や地域独自の認識とは、無関係」という指摘について考えてみよう。確かに、テキストの成立事情を考慮すれば、ここで検討しているすべての地図は中心から周縁を把握するために描かれ、中央の支配者に正統な構図として承認されてきた。だからといって、その起源が中央に発するものということにはならない。

地図のなかの主役はもちろん濟州島である。そこからある地点へ距離と方向を構図で示したり、文字で説明したりするのは濟州島とその地点との関係性を表現していることに他ならない。そのような表現が、漢城や江華島でもなく、さらには珍島や黒山島でもなく、濟州島についてのみ見られることに注目すべきではないだろうか。地図1の枠外の記述に代表されるように、濟州島にはそれを意識せざるをえない多くの体験があったはずである。それらの経験が濟州人に蓄積され、ひとつの地域観が形成されたのであろう。ある段階で、中央から派遣された人がそれをすくいにとって地図にしたのである。

残念ながら、本稿で検討しているような構図の形成に濟州人が関与した形跡を文献で確認することはできない。とはいえ、藤田のように「無関係」とするのはやや無理がある。東南アジアのある地名とおおよそその方角を知っていることと、濟州島という地名は基本的には独立した情報である。この両者を二次元の空間のなかで共存させるには、両者の関係性を描こうとする明確な意志がなくてはならない。ここに濟州人の地域観の関与を前提とせざるをえない状況がある。言い換えれば、濟州島を中心にし、その周りを朝鮮半島の地名だけでなく、東アジアや東南アジアの地名で囲む構図は、いささか大袈裟に言えば、濟州人の世界観に基礎づけられた「言説」ということができる。

## 6. 濟州島の地図の源流

これまで濟州島を主人公とする地図について検討してきたが、最後にその起源についての考えてみよう。濟州島を中心にして描いた地図として知られているもっとも古い例は15世紀までさかのぼることができる。その意味において、藤田が「混一疆理歴代国都図」に言及し、15世紀の知識によって地図が作成されていると推測した点は評価できる。

つぎに紹介する『朝鮮王朝実録』の記事は、朝鮮時代の地図に関する研究のほとんどが引用している有名なものである。1482年（成宗13）2月、南原君梁誠之は国王に12項目にわたり提言をした（『朝』成宗13年2月壬子）。そのなかのひとつは地図についてのものであった。なお、この4ヶ月後、梁誠之は68年の生涯を閉じ、結果として、この提言は梁誠之による成宗の政権への遺言となった。卒伝には、陰謀に加担した疑いがもたれたときも、世祖は彼を信じて罰することはなかったという逸話があり、クーデターによって王位を獲得した世祖の政権にとって重要な臣下のひとりであった（『朝』成宗13年6月戊申）。

梁誠之の主張は、地図というものは民間でバラバラに所蔵させるべきではなく、官府で保管すべきであるという点にあった。この項目を、これらの地図を収公し、弘文館や議政府で所蔵すれば「軍国に幸甚たり」と結んでおり、地図の情報が軍事にとって重要であるという認識からの主張であったことは間違いない。このなかで、現存していない貴重な地図の名前を列挙しているため、これまで多くの研究で引用されてきたのである。濟州島の地図は世祖の時代（1455-68年）に製作された地図のなかに含まれている。

世祖朝、臣誠之撰進八道図、閔延・茂昌・虞？（艸かんむりに内）三邑図、方今臣誠之撰進沿辺城子図、両界沿辺防戍図、濟州三邑図、安哲孫沿海漕運図、又有魚有沼永安道沿辺図、李淳叔平安道沿辺図、又下三道監司營各有図、倭僧道安日本琉球図、大明天下図、絹紙簇各一、又臣所撰地理誌内、八道州郡図、八道山川図、八道各一両界図、遼東図、日本

大明図（『朝』成宗13年2月壬子）

梁誠之があげている地図の題名から想像すると、軍事的な情報を中心とする北方の境界地域のもが目立っている。それらの地図とともに、梁誠之自身によって「済州三邑図」は作成されている。世宗から世祖にかけて、朝鮮半島の北方地域の朝鮮化が進行したことは周知のことであるが、その過程で反乱や軍事衝突もあり、朝鮮王朝の北方への関心はきわめて高く、とくに世祖は梁誠之に北方地域の地図の作成を命じており、また、梁誠之も風水の立場からするきわめて詳細な地理的な情報について世祖に報告をしている（Ledyard, 1994）。それと同時に、穏やかな朝鮮化が済州島でも進行していた（高橋、1992年）。このような政治状況は、これまで王朝の外部あるいは境界地域であったところに焦点をあわせた地図を製作するという動機の説明として整合的に理解できる。

もちろん、ここで例示されている他の地図と同様に、梁誠之による「済州三邑図」は現存していない。ただ現時点では、これがもっとも古い済州島の地図に関する記録で、当時の「辺境」に対する中央政府の関心のありかたからして、本稿で議論してきた済州島の地図の起源の有力な候補として推定しておきたい。そして、この段階での〈中心〉、すなわち漢城からきた官僚と、〈周縁〉、すなわち済州島の支配層との接触があり、二つの特徴をもつ済州島の地図の構図が成立したのであろう。

表1の概要を検討した際に述べたように、19世紀以降、地図の上部を北とし、外国の地名の含まれていない構図の地図が主流となってくることが確認できる。これは、先の二つの特徴をもつ「言説」が、済州島内ではともかく、陸地、すなわち漢城のエリートにとって過去のものとなってきたことを示唆しているのではないだろうか。

#### <参考文献>

李燦「十八世紀耽羅地図考」『地理学と地理教育』9号、ソウル、1979年。

李燦『韓国の古地図』汎友社、ソウル、1991年。

応地利明（岩波新書）『絵地図の世界像』岩波書店、東京、1996年。

オ・サンハク「『耽羅巡歴図』の地図学的価値とその意義」済州市・耽羅巡歴図研究会『耽羅巡歴図研究論叢』、済州、2000年。

ソウル大学校奎章閣『海東地図』上、下、解説・索引、ソウル大学校奎章閣、ソウル、1995年。

高橋公明「中世の海域世界と済州島」網野善彦等編『海と列島文化 4 東シナ海と西海文化』小学館、東京、1992年。

高橋公明「東アジアと中世文学」『岩波講座 日本文学史 第5巻 一三・一四世紀の文学』

岩波書店、東京、1995年。

高橋公明「海域世界のなかの倭寇——朝鮮半島を中心に——」勝俣鎮夫編『ものがたり 日本列島に生きた人たち4 文書と記録 下』岩波書店、東京、2000年。

高橋公明（日本海学研究叢書）『海域世界の中の日本海沿岸地域』、富山県、2001年、

高橋公明「文学空間のなかの鬼界島と琉球」『立教大学日本学研究所年報』1号、東京、2002年。

済州道民俗自然史博物館『済州の昔の地図』、済州市、1996年。

済州市『耽羅巡歴図』、済州市、2000年（初版1994年）。

藤田明良『『蘭秀山の乱』と東アジアの海域世界——14世紀の舟山列島と高麗・日本——』『歴史学研究』698号、東京、1997年。

藤田明良・李善愛・河原典史「島嶼から見た朝鮮半島と他地域の交流——済州島を中心に」（韓国文化研究振興財団）『青丘学術論叢』第19集、東京、2001年。なお、藤田明良執筆分は第一部「高麗・朝鮮前期の海域交流と済州島」である。

Gari Ledyard, "Cartography in Korea" in J.B. Harley & David Woodward (ed.), *The History of Cartography, Volume Two, Book Two, Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies*, The University of Chicago Press, Chicago & London, 1994.